



お伽訓話

太郎の豆

或處に太郎といふ子供がありました。太郎の家はお父様とお母様と太郎との三人の家庭で生活はあまり豊ではありませんでした。

お父様は朝早くから或工場へ出かけて晩燈火がついてから歸つて來ます。お母様はお父さんよりもつと早くホンの少し空がうす明るくなつた時分に起きますからお日様よりも早起きなのです。

太郎は今年八歳で學校は一年級です。夜はお父様お母様よりも早くから眠りますから朝はどうしても寢坊はして居られません。やはりお母様と一緒に起き出してお母様の御用の邪魔しない様に學校のお包をひろげて石板や本の御道具を

調しらべて居ゐるのが毎まい朝あさの習き慣まりでした。お母か様まんは朝あさ御ご飯はんの御お仕し度たくの間まに太た郎らうの顔かほ洗あらひや平ふ常だん着ぎをきかへるのを見みて下くだすつてそれからお父とう様さんと太た郎らうのお辨べん當だうをこしらへて下くださるのです。お父とう様さんがお出でかけなすつてから二時間じかん計はかりして太た郎らうが學がく校かうにゆく事ことは毎まい日にち同おなじ様やうにくり返かへして居ゐました。

太た郎らうは學がく校かうから歸かへつて復おさ習らひをして終とまひますと太た郎らうの好すきな事ことしてもよろしいとお母か様まんから許ゆるされてあります。がその好すきな事ことをする間まに時とき々々お母か様まんの御ご用ようをたしてあげるのです。

或ある時とき太た郎らうはお母か様まんの御ご用ようで乾かん物ぶつ屋やまで御お使つかひに行ゆきました。乾かん物ぶつ屋やの店みせには白しろい豆まめ赤あかい豆まめ黒くろい豆まめ緑きよ色の豆まめ丸まるい豆まめ細こ長ながい豆まめが幾いく種しゆもならべてありました。

太た「おばさん今日こんにちわ。青あお菰ぐんどう豆とうを一しやう升くだ下さい。」

おばさん「はい、太た郎らうさんよくお使つかひが來きますね。」

をばさんは太た郎らうの布ふ呂ろ敷しきをひろげてごく小ちひさい豆まめの半はん分ぶん位くらゐの穴あながあいて居ゐましたのを一寸ちよつと見みて緑みどり色の丸まるい豆まめを一がふ合ます枰はかで計はかつてザーツとあけました。一つ二つ

三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十で一升になりました。

を太郎さん穴があいて居ますから氣をつけてお持ちなさい。」

太エ、をばさんさよなら」

太郎は自分のかげぼうしを追ひかけながらすたく／＼生垣のそばをあるいて居ますとふるしきの穴から押し出されて豆の一つがと太郎の横の軟い地の上にポツンとおちました。

太郎はそんな事少しも心付かないで家にもとり首尾よく御用をなしとげました。澤山の中まから只一粒ふろしきの外に出た豆は高い處からおちましたのでピツクリ、すぐにむきなほつて太郎のうしろすがたを見て居りましたが

「ア、他の友たちはどういふおうちへ行つてどうなる事かしらん煮られるのか煎られるのか又はかはいいい幼稚園の子供の豆細工につかはれるのかどうなる事でせう。それにしても私一人こんな處にのこされて幸か不幸かあゝどうし

たものだらう」

豆が深く考へこんで居ますとお日様がにこ／＼したお顔であたゝかく豆さんの

豆の體はすつかり土の下に入つてしまひました。

雨はやんで夜はあけお日様はきのふの通り青ぞらにきら／＼光つて居らつしやいました。

豆は土の中に居てそんな事は少しも知りやうがありませんが少しボカ／＼あた／＼かくなるだけはわかつたのです。

「どうしてこんなにくらいのだらう。いつまでこんなくらい處に居るのはいやだなそれにしてもお日様はどうなすつたのだらう。それからきのふの皆もどうしたかしらん。」

豆さんはたゞかなしくなつて泣いてばかり居ました。幾日かたちますと豆さんはあまりあた／＼かいのでヒヨイと頭をあげますといつになくすぐ頭が上つてしかもあたりが急に明るくなりました。よく見るとこのあいだの生垣の根もとでやはりお日様は青空でに／＼。太郎はお豆を買ひに行つた日から毎日相かはらず生垣のそばを通つて學校に行つたり來たりして居ります。ふと土を見ますと今芽の出たばかりの豆の二葉が。それにたつた一本。

太郎はふしぎに思ひましてかゝんで豆を見ますと豆も上をむく拍子に太郎の目と豆の芽とがバツタリ。

豆坊ちゃんあなた私を知つて居らつしやいますか。」

太オやおもしろい豆の芽がものいふよ豆さんどうしたの。あなたには僕今始めてあふのですよ。あなたは僕を知つてゐるの。」

豆エ、知つて居ますとももう五日ばかり前あなたふろしきに豆を入れてこゝをお通りになつたでせうその折にこゝにおとされたのが私です。」

太あゝそれであなた僕を知つて居るのですね。落ちて今までどこに行つて居たんですか。」

豆イエどこにも行つては居ません。あの晩ね大雨がふりましたでせう。」

太エ、ふりました。」

豆その晩にひどくぬれてその上土の中にうづまつてしまつたのです。それから毎日お日様のお顔を見られずくらいく土の中で泣いてばかり居ました。

今朝はふしぎな事でこんな所にくびを出す事が出来ましたけれど今はもう根

も生へましたから私はこゝをおうちときめてあなたのお通りのたびにお目にかゝるのをたのしみにして居ませう」。

太郎は豆の物語をきいてやう／＼先日母さんのお使して乾物やのおばさんが穴を氣をおつけなさいといつて下すつたのに考へつきました」。

その時はたゞそのまゝで豆さんとわかれましたがそのあしたの朝學校の道に又豆さんの處に來かゝりますと太郎はおどろく事に出あひました。

二葉であつた豆が一晩の中に生垣をつたつてお日様の處まで高く／＼のびて居たのでありました。

そればかりでなく一ばいみのいりきつたさやがふさふさとなつて居りました。

太郎はかしこい子でありましたからこのまめをかあさんにあげませうと思つて一つとりますとこれはふしぎ手足のある豆の一寸法師がヒヨイ／＼／＼と出て來てよく見ると帽子かぶつて洋服きて劍さげてたしかに兵隊でした。

太郎は又他の一つをとりましたらさやがわれて又ヒヨイ／＼／＼兵隊がとび出しました。

今度はどうかと思ひ又一つとりますと又中から一寸法師の兵隊が出て来て見て居ると皆正しく太郎の前にならんで居ります。

太郎はおもしろくてたまりませんからお父さんのお年の數ほどとつて見ましたら二百ばかりの豆の兵隊が行列して太郎の號令をまつて居ました。

太郎は俄に大將になりましたからうれしくてたまらず。

「左向ケ左 前へすゝめ。一二一二」

と號令かけますと小さいくつの音をさせて足なみ正しく進み始めました。

太郎はその兵隊を率ゐて先お母さんに見せましたらお母さんが

「太郎やお前よい子だからつよい大將になつて下さい」と仰つて母さんもうれしさう。

豆の兵隊は夜になると生垣の豆のつるに歸つてもとのさやの中になびります、太郎がそのそばに行つて號令をかけるとすぐに出て来て見事に訓練をはじめたのでした。太郎はどんなにうれしい事でせう

めでたし／＼